

わたしがこの屋敷に連れて来られたのは、恋でも夢物語でもなかった。

父が残した借金を肩代わりしてもらう代わりに——大企業の社長と結婚する契約を結んだからだ。

もちろん、愛されて選ばれたわけじゃない。

彼には「妻が必要」という事情があった。

株主や世間に誠実な家庭人を演じるため。

親族からの結婚圧力を退けるため。

だからこそ、逆らえない立場のわたしは都合がよかった。

利用されている。

頭ではそう理解しているのに、胸の奥はざわついて仕方がなかった。

怖いのに、どうしても気になってしまう。

どんな人なんだろう……というワクワクが、じつとりと心臓を締めつけていた。

黒塗りの車に揺られながら、窓の外を見つめる。

都会の夜景が流れていく。

無数の灯りがきらめいて、遠くから眺めると宝石みたいに美しい。

でも、そこに自分が属している気はまったくしなかった。ただ運ばれていく。運命に逆らえない囚人みたいに。

革張りのシートは、やけに滑らかで冷たい。

本当なら心地いいはずなのに、わたしの背筋は固くこわばるばかり。

窓ガラスに映る自分の顔は、少し青ざめて見えた。

それでも……頬の奥がうっすら熱を持っているのは、緊張のせいだけじゃない。

——社長夫人。

その言葉を心の中で繰り返すたび、現実感はどんどん遠のいていく。

テレビや雑誌でしか見たことのない彼が、わたしの「夫」になる。

怖い。でも、ほんの少しのワクワクがどうしても抑えられなかった。

シートの上で、指先をきゅっと組み合わせる。

爪先が靴の中で揃ってしまい、身体は硬直したまま。

深呼吸をしても、肺に入る空気は冷たいだけで落ち着けなかった。

やがて車が静かに止まり、扉が開く。

夜風が一気に流れ込み、頬を撫でていく。

思わず肩をすくめながら、外へ出た。

目の前に広がっていたのは、白亜の巨大な邸宅だった。

月明かりを受けて、壁面は青白く輝いている。

高台にそびえ、街の灯りを遠くに見下ろすその姿は、圧倒的な存在感を放っていた。

大理石の階段が真っ直ぐに伸び、重厚な扉が待ち構えている。

足元に目をやれば、石畳は磨かれ、わたしの影をくつきりと映していた。

……すごい。

まるで映画のワンシーン。

でも、その主役はわたしじゃない。

どう見ても場違いで、小さな体がますます縮こまっていく。

冷たい夜風に、膝がかすかに笑った。

深呼吸をしても震えは止まらない。

それでも、ここからはもう引き返せない。

——今日からわたしは、ここで暮らす。

社長夫人として。

扉が開かれると、別世界の空気が押し寄せた。

赤い絨毯が長く伸び、高い天井からは大きなシャンデリアが光を降らせている。

豪奢すぎる光景に、息をするのも忘れそうになる。

歩を進めるたび、靴音がやけに大きく響いた。

そのたびに「ここにいるのは間違いだ」と囁かれているようで、

心臓がきゅつと縮む。

壁際には大きな絵画が並び、無機質なほど整えられたインテリアが広がっていた。

美しいのに、温もりはどこにもない。

その冷たい整然さが、余計にわたしを小さくさせた。

ふと、視線を感じて立ち止まる。

空気がひんやりと張り詰めた。

階段の上から、低い声が響いた。

「来たか」

背筋がびくりと震えた。

顔を上げると、そこに彼がいた。

階段の上に立つ彼は、雑誌やテレビで見たまま……いや、それ以上
上に完璧だった。

真っ黒なスーツに包まれた長身。

肩の線は無駄なく整い、背筋は一本の線のように真っ直ぐだ。

まるで舞台に立つ王のようで、わたしは思わず息を呑んだ。

シャンデリアの光を受け、漆黒の髪が艶やかにきらめく。

頬の彫りは深く、彫刻のように整った顔立ち。

遠くから見ているだけなら、きっと誰もがうっとりするだろう。

——やっぱり、すごい。

怖いのに、胸がどくどくと早鐘を打つ。

ほんの少しのワクワクが、どうしても抑えられなかった。

彼が一步、階段を下りた。

革靴の硬い音が、広いホールに低く響き渡る。

それだけで空気が押し寄せ、心臓がきゅっと縮んだ。

また一歩。

そのたびに距離が縮まり、逃げ場が消えていく。

わたしの足は床に縫いとめられたみたいに動かず、ただ息を潜めることしかできなかった。

やがて彼は階段の中ほどに差しかかり、薄く唇を開いた。

「契約どおり、今日からおまえは俺の妻だ」

低く響く声。

胸の奥にずしりと落ちて、全身を痺れさせる。

——え。

最初の一言が、それ？

“おまえ”呼び。

ロマンチックのかけらもない。

心の中でずっとこけそうになった。

ほんの少しだけ夢見ていた「夫婦らしい言葉」は、一瞬で粉々に砕かれた。

幻滅。

……のはずなのに。

なぜか背筋がぞわぞわと粟立ち、胸は高鳴るばかりだった。

彼は淡々とした声音で続ける。

「俺の傍に立つということは、名実ともに——いや、少なくとも世間にそう見せるということだ」

言葉は冷静な理屈にすぎないのに、耳の奥にまわりつく声はい

やに熱っぽく響く。

喉がからからに乾き、呼吸が浅くなる。

「……表向きは、だがな」

唇の端がゆっくりと吊り上がる。

冷笑のようできて、猛獣が獲物を前にした余裕にしか見えない。

胸の奥がずくと跳ね、期待とも恐怖ともつかない感情が渦を巻いた。

彼はさらに階段を下り、やがてわたしの目の前に立った。

至近距離で見るその顔は、完璧すぎて現実味がなかった。
肌の滑らかさ、瞳の深さ、吐息の温度。

ひとつひとつが濃密に迫ってきて、逃げ場を奪う。

わたしは視線を落とし、両手をぎゅっと握りしめた。

小さな自分の手が、ひどく頼りなく思える。

震えを隠すために、さらに強く握り込んだ。

「怯えるな」

不意に、彼の声がすぐ近くで響いた。

耳の奥を震わせる低音。

その響きは鋭いのに、不思議とやわらかな温度を帯びていて、余計に混乱する。

「俺が欲しいのは、従順な人形じゃない」

囁きが耳にかかり、小さく肩が跳ねた。

思わず顔を上げてしまう。

その瞬間、瞳が真正面からぶつかる。

吸い込まれそうな漆黒に、射すような熱が宿っていた。

視線を逸らそうとしても逸らせない。

胸がきゅうと締めつけられ、喉が渴いていく。

頬が熱を帯び、まぶたを閉じる勇氣すら出なかった。

「これからは人前で“仲睦まじい夫婦”を演じてもらう」

静かな言葉なのに、圧力があつた。

背中が壁に追い詰められたみたいに、息が詰まる。

「……っ」

情けない声が、かすかに漏れる。

「社交界も記者会見も控えている。親族は噂好きだ。

一度でも綻びを見せれば、たちまち嗅ぎつけられるだろう」

淡々とした理屈なのに、わたしの全身を絡め取る鎖のように響いた。

震える指先から力が抜け、膝がかすかに笑う。

「だから——演技が拙ければ、すぐに隙を突かれる」

胸の奥に重く沈む言葉。

形式だけでも夫婦らしく振る舞わなければならない。

それは頭で理解しているのに、心臓は早鐘を打つばかり。

でも。

どうして今、この密室で、二人きりで。

まだ誰の目もないのに。

戸惑うわたしを見透かしたように、彼が身を傾ける。

漆黒の髪がさらりと揺れ、頬をかすめた。

吐息が触れる距離に、思わず息を呑む。

耳朶に低く、熱を帯びた声が落ちた。

「――夫婦らしく見せるために、演技の練習をしようか」

心臓が跳ね上がり、全身が固まった。

近すぎる距離。

逃げられない予感だけが、ぞくりと背筋を這い上がっていった。

「や……っ、いきなりそんな……」

抗議の言葉はかすれ、震えながら空気に溶けていった。

次の瞬間、顎を指先で軽くすくい上げられる。

冷たく見える長い指が、肌に触れた途端に熱を残す。

「目を逸らすな。妻なら、これくらい当然だろう？」

低く響く声が喉を震わせ、胸の奥を直撃する。

強引に視線を絡められ、逃げ場がなくなる。

そして――唇が触れた。

「ん…っ♡」

触れただけのはずなのに、息が止まる。

柔らかいはずの唇が、ぐいと押し込まれてきて、口内に熱が流れ込む。

舌先がずるりと忍び込み、強制的に絡め取られる。

「んっ♡ やあ…っ♡ んっ、ふあ…♡」

舌と舌がぬるりと擦れ合い、粘つく音が響いた。

ちゅぷ、ちゅる……くちゅ。

頭の奥がくらくらして、膝が震える。

抗おうとすればするほど、舌は深く絡みついてきて、甘い痺れが喉の奥を伝う。

息継ぎを奪われ、意識が蕩けていく。

ようやく唇を解放されたとき、熱い吐息が耳をかすめた。

「震えてるな。……演技にしては、素直すぎる反応だ」

「ち、違っ……そんな……♡」

必死に否定する声も、耳朶を舌でなぞられた瞬間にかき消された。

ぞくぞく……ちりちり……と電流が首筋を駆け抜ける。

「やっ……♡　そこ……だめ……っ♡」

首筋に唇が落ち、ちゅ、ちゅぷ……と吸い付かれる。

生温かい感触が痕を刻み、吸われた場所がじんじん疼いた。

「んあ……♡ んっ……♡ あ……♡」

抵抗の声は甘く震え、自分でも信じられないほど蕩けていた。
彼の片腕が腰を抱き寄せ、逃げ場を完全に奪う。

指先が背中をなぞる。すうっと一本、ゆっくりと。
それだけで肌が粟立ち、胸の奥がきゅうと跳ねた。

「まだ始まったばかりだ。……ほら、力を抜け」

囁きが首筋に落ち、背骨を震わせる。

押し込まれるようにソファへ沈み、背中が沈み込む。

次の瞬間、両手首を捕らえられ、頭上へと引き上げられた。かちり、と革のベルトが留められる音。腕が動かなくなり、全身が熱く痺れる。

「なっ……やめっ、離して……！」

必死に叫んでも、返ってくるのは低く押し殺した笑い声。

「夫婦なんだから当然だろう。……演技の練習だ」

手首を縛られ、逃げられない現実が全身を貫いた。
その瞬間、胸の奥がずくん、と跳ね上がる。

大きな掌が、胸の上に置かれた。

布越しなのに、その重みだけで呼吸が乱れる。

やがて――むにゅ、と柔らかさを握り込まれた。

「んっ♡」

反射的に声が漏れる。

掌全体でぐにゅ、ぐにゅと押し潰されるたび、布の裏で先端が擦れて自己主張を始める。

乳首にかかるわずかな摩擦が、痺れるように意識を攫っていく。

「や……あっ♡ やめ……っ」

必死に首を振って抗う。

けれど彼の指先は、さらに執拗に沈み込む。

くり、と布の上から先端を探り当て、押し転がす。

「ひゃ……っ♡ あっ……♡ だ、めえ……♡」

背中がぞくと震え、腰が勝手に浮いた。
身体は否定できず、熱を帯びていく。

「ん……可愛い反応だ」

意地悪く笑いながら、布をずらされた。

冷たい空気が胸に触れ、乳首がぴんと立つ。
その瞬間、彼の視線がそこに突き刺さった。

「やっ……見ないで……っ♡」

恥ずかしさで顔が一気に熱くなる。

縛られ、隠せず、抗えず、ただ見られるだけ。

羞恥の重みで目に涙がにじむ。

指先が乳首をつまみ、きゅ、と軽く摘ままれた。
胸の奥がきゅんと痺れ、身体がびくんと跳ねる。

「んっ♡ あっ♡ やめ……っ♡ いやあ……♡」

今度はひねられ、くりくりと転がされた。

カリカリ……コリコリ……と先端を弄ばれる。

甘い痺れが背骨を駆け抜け、息が止まらなくなった。

「や……だめ……っ♡」

涙声で抗っても、指先は容赦なく攻め続ける。

乳首を摘まみ、ひねり、弾く。

そのたびに身体が跳ね上がり、甘い声が勝手に漏れた。

乳首を執拗に転がされ、涙声で抗っていたわたしを、彼は面白そ

うに眺めていた。

そして、ゆっくりと指先を胸から離し、その手を下へと滑らせていく。

布に覆われたお腹を撫で、腰骨をなぞり、太腿の上をすうつとなでる。

ぞわぞわと鳥肌が立ち、背筋が小さく震えた。

「やつ……そこは……♡」

必死に腰を引こうとしても、両腕は縛られたまま。

バランスを失い、かえって身じろぎする姿をさらしてしまう。

彼の指先はわざと外側を撫で、じらすように太腿を這う。

そして今度は、内腿へ。

ひざのすぐ上、敏感な場所にかすかに触れては、すぐに離れる。

「ひ う …… つ ♡ ん …… だめ …… つ ♡ 」

ちり、ちり…と熱を残す指の感触。

焦らされるほど、全身の力が抜けてしまう。

指先はさらに上へと進み、やがて下着の布地に触れた。
ぴたりと押し当てられただけで、喉がひゅつと詰まる。

「や……っ♡　そこは……っ♡」

必死に否定する声。

けれど、布越しにすり……と縦に撫でられた瞬間、腰がびくんと跳ねた。

「ひゃあ……っ♡♡」

布と肌が擦れる感触が、直に響く。

すり、すり……こす、こす……。

割れ目に沿って何度も往復されるたび、熱がじわじわとこみ上げる。

「んっ♡　だめ……っ、やあ……っ♡」

涙がにじみ、頬が熱い。

それでも布地はすぐに湿り、ぴたりと肌に張り付いていく。

「……見ろ。もう染みてきてる」

わざと低く囁かれ、羞恥で胸が詰まった。

布越しに、濡れた部分をぐっと押し当てられる。

じゅ、といやらしい音がして、呼吸が乱れる。

「ちが……っ♡　ちがうのに……っ♡」

必死に首を振るのに、腰は勝手に反応してしまう。

強く押し付けられるたび、腰がくいと上ずってしまう。

彼はその様子を愉快そうに見下ろしながら、指をさらに動かす

た。

すりすり……くちゅ、くちゅ……。

濡れた布地を上下に擦られるたび、全身に甘い痺れが走る。

「んあ……っ♡ あっ♡ や、やあ……♡」

声は裏返り、縛られた両手首が震える。

羞恥と快感が入り混じり、涙が頬を伝った。

彼の指先は、割れ目に沿って執拗に撫で続ける。
じわりと熱が集まり、布の下がじくじくと疼く。

「……素直だな。嫌がるふりをして、身体は正直だ」

「ち、違……っ♡ 違うのに……っ♡」

必死に否定しても、腰はまたびくと跳ねる。

布越しの愛撫が、敏感な一点を何度も擦り立ててくる。

こす、こす……すり、すり……。

湿った音が重なり、恥ずかしさで胸が張り裂けそうになる。

「やあ……っ♡　だめ……っ♡　そこ……っ♡」

腰が逃げようと震えるのに、縛られた腕が邪魔をしてどうにもならない。

結局、彼の指先に抗えず、甘い声を垂れ流してしまっただけだった。

布越しに執拗に擦られて、全身が熱に浮かされていく。

じゅく、くちゅ……いやらしい音が下腹にまわりつき、羞恥で胸が苦しくなった。

「やあ……っ♡　もう……だめ……っ♡」

縛られた手首をぎゅっと握り締め、涙声で訴える。

でも彼の指先は、布の奥に潜り込んで敏感な粒を捕らえた。

「ひやあ……っ♡♡　あっ♡　や……♡　やめえ……♡」

こり、こり……ぐりぐり……。

一点を容赦なく弄られ、腰が勝手に跳ねる。

声は甘く裏返し、視界がじわじわ白く霞んでいく。

「ん あ あっ ♡ あっ ♡ だ、めっ ♡ イク……っ ♡ イクの……
♡」

絶頂が目前に迫ったその瞬間——指が、すっと離れた。

「……っ ♡ はあ……っ ♡ や、やめ……なんで……っ ♡」

置き去りにされた身体がびくびく痙攣し、喉から嗚咽まじりの声
が漏れる。

腰はまだ小刻みに震えているのに、あの甘い波は訪れない。
胸の奥がきゅうっと縮み、喉に熱い息が詰まった。

イケなかった。

もう少しで届いたはずなのに、途中で突き放された。
疼きだけが残って、下腹がじんじんと痺れている。

涙に滲む視界で彼を睨み上げると、彼はゆっくりと口角を吊り上げた。

「嫌だったんだろ？」

低く囁かれ、胸の奥がぎゅっと締めつけられる。

「だったら、ここで終わりにしてやろうか」

意地悪な声音。けれどその瞳には、どうしようもなく楽しげな光が宿っている。

——わたしが必死に震えて、甘い声を漏らすのを見て、愉快そうに。

「ち、違っ……♡　そんなの……っ♡」

涙声で否定しても、疼きは止まらない。

達しきれなかった熱が行き場を失い、全身を焦らす。

どうしようもなく惨めで、情けなくて、でも身体は彼を求めて疼いていた。

彼は愉快そうに笑い、わたしの反応を観察するように見下ろしている。

胸の奥では切なさで羞恥だけが膨らみ、呼吸は乱れたまま。

——演技の練習って、こんなことまでするの？

この先どうなっちゃうの、わたし……！！？

頭の中はパニックで、情けない不安ばかりが渦を巻く。

涙で滲む視界の中、彼の意地悪な笑みだけがやけに鮮やかに輝いて見えた。